



行列(部分)

口ウを使い、一体一体異なる形に作られる。1日に10体作れることもあるが、ブロンズになるものはそこからまた厳選される。(那須野が原博物館蔵)



制作中の三木氏を写した貴重な写真。人間の顔には今も興味が尽きないそう。

近くのアートを見に行こう わがまちのアーティスト

本市出身の彫刻家である三木俊治氏。那須野が原博物館に多数のアート作品を寄贈したり、市ふるさと応援隊として活動したりと、このまちのために尽力される三木氏に、アートへの思いなどを伺った。



北国からの男

三木氏は、「メキシコの旅から戻ったら突然良い作品ができた」と語った。(那須野が原博物館蔵)

を考へてはいけない」と熱い眼差しで話してくれた。その後も国内外を旅する三木氏だが、何かに行き詰まったりときは、外からの刺激を受けることが大切だと語る。それは、「歩き回る一人の愚者は座して考える十人の小賢しき者に勝る」という彼の信条からもうかがえる。

アートが教えてくれる気付き

大学で教鞭を執る教育者だった三木氏は、学生への指導にも自らの強い信念を持つ。数百点を超える作品を授業のためにコレクションしたが、ジャンルも時代も多岐にわたるのが特徴。「自分のやり方を教えるもそれは過去のものと三木氏は語り、自身のコレクションを通して、学生に多様なアートのあり方を学んでもらうのだそう。三木氏が、各作



行列(L-R)

左肩からの腕がいつの間にか右手になるエジプトの謎の彫刻。それに気づいた三木氏が、その上から行列を刻んだ謎深い作品。(那須野が原博物館蔵)

品のどこに惹かれ、所蔵するに至ったのか、そのプロセスを学生に考えてもらうことが、未来の正解を見つけて出すために重要なのだという。

2015年には、そんな貴重なコレクション作品を那須野が原博物館に寄贈いただいた。「幼い頃からアトに触れる機会をつくりたかった」と寄贈への思いを語り、「アトに興味がなかった人も、博物館を訪れた際に、少しでも目に触れれば」と期待を寄せた。続けて、「アトには決まった答えがあるわけではない。人と違う自分だけの答えを見つける訓練ができる」とアトの神髄を解いてくれた。時代とともにアトも変化するが、「常に現代にフォーカスしていれば表現は無限にある。それが未来を見据えること」とこれからの抱負を語ってくれた。



彫刻家 三木 俊治 さん

1945年生まれ。旧塩原町出身。1972年東京造形大学彫刻専攻卒業。1973~2016年東京造形大学助手-常勤講師-助教授-教授-非常勤講師。現在までに日本各地・韓米独仏西トルコで個展、グループ展を100回以上開催。この間、高村光太郎大賞展=美ヶ原高原美術館賞、現代日本具象彫刻展=大賞、ほか受賞多数。2015年那須塩原市より表彰。

自分の思いをまっすぐ作品に

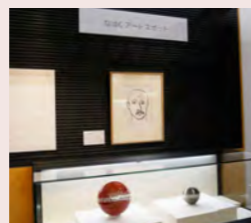
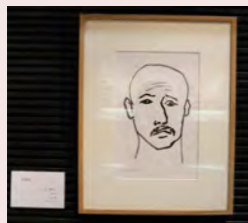
彫刻家を志して、東京造形大学に進学した三木氏。教授から出された課題をこなすだけの大学生活に「アトって何だろう、自分にとっての彫刻とは何か」と疑問に感じるようになり、答えを探すために世界各国を旅するようになったという。

当時話題となったフランスの小説家サルトルの「飢えた子を前にして文学に何ができるか」という言葉をきっかけにインドへの旅を思い立った三木氏。文学を彫刻に置き換えたらどうなのかという思いから、いざインドへ降り立つと、「想像を絶する現実の前に自分はどうすることもできない。それまでの自分の常識が通用しないことに気づいた」と大きな衝撃を受けたそう。そんな中、「インドで道一杯に人が列をなす光景を彫刻で表現してみたくなった」と当時を振り返った。この経験が、10年後に代表作の一つとなる「行列」の誕生につながっている。

また、メキシコで偶然訪れたインディオの村。そこで見たのは、原始的な織り機で驚くほど美しい織物を設計図もなしで黙々と織っている老婆の姿。三木氏は「自分の中から湧き出るものを素直に形にするのがアート。他人からどう評価されるか

アート作品に親しもう ~なはくアートスポット~

那須野が原博物館の所蔵品から三木コレクションを中心に現代アート作品を1年にわたって紹介しています。



既成をこえろ

樋口 明宏 11月13日(水)まで



不思議な素材

伊藤 誠 12月19日(木)~1月29日(水)



古代を想う

難波田 龍起 1月30日(木)~2月26日(水)